一 朱雀院は退位後の帝の住む御所の名。三条朱雀にあつた。先帝の賀のために今上（桐壺帝）が行幸されるのである。
二 后・女御・更衣などの御方々。
三 舞楽の予行演習。
四 公の場所なので、特に官名でよんでいる。
五 雅楽の名。唐楽。二人で舞う。
六 舞の相手。
七 詠は、舞楽の舞の中に、舞人が詩句などを朗詠すること。青海波には詠がある。
八 迦陵頻伽は、極楽浄土に住んでいるといわれる美声の鳥。「迦陵頻伽の声」を一語として、その上に「御」をつけている。

朱雀院の行幸は十月の十日あまりなり。世の常ならず、面白かるべき度のことなりければ、御方々、物見給はぬことを口惜しがり給ふ。上も、藤壺の見給はざらむを、飽かず思さるれば、試楽を御前にてせさせ給ふ。源氏の中将は、青海波をぞ舞ひ給ひける。片手には大殿の頭中将かたち用意人には異なるを、立ち並びては、なほ花の傍の深山木なり。入り方の日影さやかにさしたるに、楽の声まさり、物の面白き程に、同じ舞の足踏おももち、世に見えぬ様なり。詠などし給へるは、これや仏の御迦陵頻伽の声ならむと聞ゆ。面白くあはれなるに帝涙をのごひ給ひ、上達部皇子たちも、みな泣き給ひぬ。詠はてて、袖うちなほし給へるに、待ちとりたる楽のにぎはゝしきに、顔の色あひまさりて、常よりも光ると見え給ふ。春宮の女御、かくめでたきにつけても、たゞならず思して

「神など、空にめでつべきかたちかな。うたて、ゆゆし。」

と宣ふを、若き女房などは、心憂し、と耳とゞめけり。藤壺は、おほけなき心のなからましかば、ましてめでたく見えまし、と思すに、夢の心地なむし給ひける。宮は、やがて御宿直なりける。

「今日の試楽は、青海波に事みなつきぬな。いかが見給ひつる。」

と聞え給へば、あいなう、御いらへ聞えにくくて、

一 春宮の母である弘徽殿女御。
二 分不相応な。藤壺に対する源氏の思慕の情をいう。
三 源氏の舞が。
四 「あいなし」は「愛無し」を語源とするといわれるが、語義がはっきりしない。無意味だ・つまらない・どうしようもないなどの意と考えて、ほゞ当るようでもある。